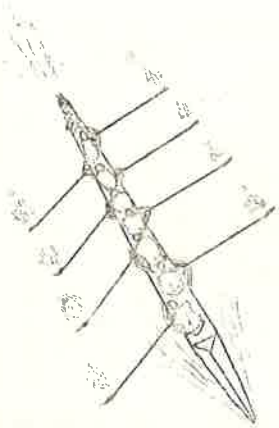
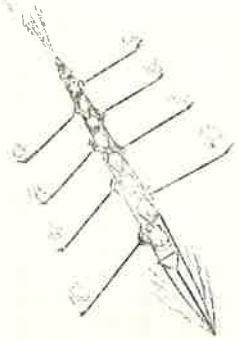
関　二対〇　美馬（京外大）
四回戦
宮崎　一対二　吉松（関大）
関　二対一　森（近大）
五回戦
関　二対〇　杉村（岡山大）
準々決勝
関　二対〇　中西（近大）
準決勝
関　〇対二　山口（近大）
三位決定戦
関　〇対二　竹原（近大）
シングルス関久幸（本学）
全日本学生バドミントン選手権
四三年一一月四～一〇日
愛知県体育館（名古屋）
＜ダブルス＞
二回戦
吉井　〇対二　桶谷（中京大）
関　二対〇　青柳（久留米大）
萩原　〇対二　杉山（日大）
宮崎　二対一　佐藤（日大）
米納　〇対二　遠藤（中大）
林　〇対二　瀬戸（立教）
岩井　〇対二　宮川（関東学）
三回戦
関　〇対二　栂野尾（法大）
宮崎　〇対二　平井（慶大）
ベスト三二　関（本学）宮崎（本学）
＜ダブルス＞
一回戦
米納・宮崎　二対一　蛯谷・金林（富山大）
岩井・吉井　二対〇　杉村・赤沢（岡山大）
斉藤・林　〇対二　佐々木・曳池（東北学院）
二回戦
米納・宮崎　〇対二　伊藤・杉山（日大）
萩原・関　二対〇　山並・加藤（東北学院）
岩井・吉井　二対〇　熊丸・青柳（久留米大）
三回戦
萩原・関　一対二　立野・瀬戸（立教）
岩井・吉井　一対二　河田・山本（名商大）
ダブルス順位萩原・関（本学）
岩井・吉井（本学）ベスト三二
＜団体戦＞
一回戦
同大　三対〇　愛知教育大
二回戦
同大　〇対三　立教大
団体戦順位九位本学
対関東学院定期戦
四三年一一月二四日
横浜YMCA体育館
同大　二対七　関東学院大
対立教定期戦
四三年一一月二六日
立教大体育館
同大　一対八　立教大
対関西大学定期戦
四三年一一月三〇日
関大体育館
同大　三対六　関西大学

## ◇漕艇部





部長　出石邦保
監督　四方久男
主将　清水正俊
主務　高橋　滋　大津市瀬田橋本町　同志社大学漕艇部合宿所　TEL　〇七七五四五四五－五－〇七〇二
▽女子の入部可（ただしマネージャーとしてのみ）
▽練習場　瀬田川・琵琶湖
連絡先　大津市瀬田橋本町同志社大学体育会漕艇部合宿所　TEL〇七七五四－五－〇七〇二　交通機関　国鉄石山駅下車徒歩一〇分
▽入部金　二〇〇〇円　部費月二〇〇円

▽シーズン　十月〜八月
▽練習時間　午後五時より二時間半
▽特色　ボートという競技は大学入学後始めても本人の努力次第で必ず全日本クラスの選手になれるというのが大きな特色である。さらに毎年、レギュラー、ジュニアを問わずレガッタに出場する。クルーの構成が各学年にわたる為、縦のつながりが密接である。あくまで個性を尊重し、生理学にのっとった科学的トレーニングで選手を強化する。

関西学生漕艇リーグ戦
四三年五月三〜五日
瀬田川ボートコース
順①大阪大②大工大③関大④京大B⑤同大四勝四敗

メキシコ五輪予選チャレンジレース
四三年六月二三日
戸田オリンピックボートコース
▽午前の記録
A組①　慶大　六分二七秒六
B組①　早大　六分三〇秒三
C組①一橋大　六分二九秒〇
D組①　同大　六分二八秒二
②東外大　六分三一秒〇
③　東大　六分三七秒三
▽午後の記録
E組①　同大　六分一五秒九
②一橋大　六分二五秒七
〔エイト目標タイム〕
六分一〇秒〇

本レースは、四月JOCにより「査定ゼロ」とされた漕艇を何とかメキシコ五輪のワクの中に入れるべく、好タイムを出す目的で催された記録挑戦会であった。この結果強化クルーは一艇にしぼられ、好記録を出した本学クルーが指名された。

全日本選手権兼メキシコオリンピック代表選考会
四三年八月二三〜二五日
戸田二千メートルコース
▽予選①　同大　六分二秒一
▽準決勝
A組①　慶大　六分一八秒七
B組①　同大　六分一五秒〇
②一橋大　六分一七秒一
③　明大　六分二六秒二
▽決勝①　同大　六分一秒四
史上二位の快記録。七七年ぶり、初の栄冠
②　慶応

本レースは日本漕艇協会がエイトクルーをメキシコへ何としても派遣すべく六分〇五秒の目標タイムを決めて行なわれた。予選にて東大、明治と対戦、千メートルですでに二位以下を離しそのままゴールイン。タイムは六分〇二秒一を出し、関係者を驚かせた。これまで絶望視されていた日本ボート界の救世主となり、一躍クローズアップされた。第二日目の準決勝では前年度優勝の一橋大を破り、逆風下で六分一五秒〇と記録は悪いながらも最高タイムで決勝へ。決勝一コース同大、二コース一橋大、三コース早稲田、四コース慶応。スタートでハイピッチで飛び出し、我がクルー二〇〇メートルで半艇身リード。千メートルで慶応は必死に追い上げその後数度スパートをかけ、一八〇〇メートルでは逆にややリード。スタート以来ずっとコンスタントピッチを保ってきた我がクルーは、遂にここで本年度春以来初めてのスパートをかけ、もつれあいながらゴール。最後の一ストロークで勝負を決めた。タイム六分〇一秒四。明治一四年創部以来七七年振りチャンピオンに輝いた。

メキシコ五輪出場正式決定〃
四三年九月二日
JOC総会
監督四方久男、コックス山本克美、㈡福益敏、㈢田中重次郎、㈣中田二三男、㈤宮川滋、㈥加藤忠正（主将）、㈦村井富雄、㈧新井喜節。愛艇「ワイルドローバー四世号」＝校祖新島襄が函館から、進取の意気に燃えてアメリカへ渡ったときの船の名前を試合艇に命名したもの。クルー平均身長一メートル八〇、体重七四キロの本学初の大型クルー。

メキシコオリンピック
九月末メキシコ入りした同志社クルーは、アカプルコの港湾ストのため、愛艇の到着が一週間以上遅れ、その間、陸にあがったカッパ同然であった。十月四日より乗艇練習開始、そこではじめて空気の希薄さの恐しさを感じたという。エイト予選は十



月十三日より始まった。我がクルーは、ラスト二〇〇mでメキシコに抜かれ最下位。敗者復活戦、6〜12位決定戦にも地元メキシコに逆転された。結局、高地順応のために時間が十分なかったこと、さらに五輪出場決定があまりにも遅すぎたことが、クルーの実力の半分も出せなかった原因であろう。

## 「貴重な体験」

漕艇部主将　加藤忠正

メキシコシティといえば、だれでも空気が稀薄で低地の⅔位であるということを知っている位で実際に明確なことは分らないと思います。私の体験から述べますと、酸素が稀薄なことは、ただ呼吸困難な状態をもたらすだけでなく、そこから筋力にも影響を及ぼし、筋力自体の持久力をも弱めて行くのです。また、高地は低地に比べて疲労度が大きく、日一日と疲れが重なっていくのを感じました。

気候は日本のように湿度は高くなく、からっとしており、日中はかなり気温が高く、まるで真夏の様です。しかし夜間はかなり冷え込み、気温差が大きい様です。ボートコースのあるソチミルコは、木々に囲まれた静かな観光地です。水質自体は戸田よりもかなり軽く、コースも短く見えました。しかし漕いでみると水は重く、苦しくて、正直な所どうしようもありませんでした。

我々のクルーは、オリンピックでは見事な負けっぷりで、レースについては完敗としかいいようがありませんでしたが、今の私には高地に対する準備不足が悔やまれてなりません。あの敗戦から、日本の漕艇界がこのドン底からはい出し、外国クルーに追いつくには何が欠けていたか、どうすれば良いかについて、練習やレースから私が感じた事を述べてみたいと思います。

私は、メキシコオリンピックが日本漕艇界の夜明けであると思っております。あの無残な敗戦はかならずしも艇の構造とか空気が稀薄であったという問題だけで、簡単に片づける事は出来ません。たとえあのレースが高地でなく低地で行われたにしても、日本と外国の実力差は今の現状ではどうにもならないことでした。

今年は全日本までは例年の様な調子の大きな波はほとんどなく、念願の優勝を勝ち取る事が出来ましたが、全日本レガッタ終了後、我々のクルーがすっかり調子をおとしてしまい、その調子でメキシコまで行った様な気がしてなりません。結局クルー自体がまわりの環境におぼれず、その環境に立ち向って行く力を持っていたならば、もっといいレースが出来たにちがいないと悔んでいる。

外国クルーの強さにはただ驚くばかりで、一体あの強さがどうして生じて来たのか、体力の相違も大きな問題でありますし、その他種々の要因があると思います。そこで底辺の拡大という問題は、これからわれわれが開拓して行かなければならない大きな課題であり、日本の漕艇界が世界に伸びるためには、強力に推進しなければならない絶対条件であると思います。漕艇人口の増大を目指すことはいうまでもありませんが、人気のあるプロ、アマスポーツに、素質の良い選手が流れているという事実。その上、漕艇人口が少ないという事について、今さらのように考えさせられます。

次に種目についていえば、ナックル、フィックスを漸次廃止して、シェル艇へ早急に移行すべきであると思います。たとえ上で述べた漕艇人口の増大ということがたっせられなくても、小艇などで質のいいキャリアのあるオアズマンと高校から育てていくべきだと思います。もし可能ならば、中学時代からエイジグループのように、シェル艇に慣れる、水に慣れる、オールを握るということを体得させるべきだと思います。それは資金面などいろいろ問題がともなうと思いますが、地道な啓蒙を展開していけば、道は開けるものと信じます。

つぎに社会人を対象にしたクラブを増設して、キャリアのある選手を養成していくことも併行的に実現しなければならないと思います。現状のように大学四年間だけでは、ボートの持つ高度の技術、

理論、それに要する体力を完全に取得することは不可能であります。これからの私は、ボート界発展のために以上に述べた方向に沿って微力ながら寄与したいと思っております。

ボート部新主将　清水正俊

その日のソチミルコは太陽が、無情にまでも我々を照りつけ、一層緊張度を高めた。すでに予選レースは小艇の部から始められていた。もうオリンピック開始の興奮があたりをすっかり包んで、我々をもまき込んでいた。コースの前方にそびえる暗緑色の小高い山が異様に大きく見え、メキシコ特有の青い空と、白い雲が昨日とは違って一層青く、一層白く見えた。とうとうその日が来たのだ。

我々はメキシコへ着いて以来、本当に愛艇ワイルドローバー四世号で練習したのは十日にも満たなかった。日本からの発送が遅れ、又メキシコへ着いても港湾スト等で更に遅れるという予想外の出来事によって。それまではイタリア製の艇で一応調整していたが、日本の艇と違って艇も長く、重く又、ローイング上のポイントの置き方の違いで、我々の愛艇とはかなりの違いがあった。その為かえって調子を乱した様だった。ワイルドローバーが着き梱包を解き、その容姿を見せた時、「本当によく来てくれた。又我々を乗せて走ってくれよ」と、彼女を撫でながら、むしょうにうれしかった。彼女は長旅の為に少しいたんでいたが、すぐリガーを取付けられ、ソチミルコの水、彼女が生まれて初めての異国の水に浮べられた。イタリア製の外人女と違って、大和撫子の軽くて漕ぎやすかった事、次の日からいよいよ本格的な練習が再開された。初めのうちは五百を漕ぐことさえきつく、こんな調子では二千米漕げるのだろうかと思った。だが、人間の構造の偉大なこと、四、五日で、なんとか漕げる様になって来た。そして次は千米と除々に距離を延ばしていった。そして千米をなんとか我々のスピードで漕げる様になった頃、ついにその時がやって来た。果して二千米漕げるだろうか。我々のレースの前に行なわれた小艇の部では、レースの途中での棄権者、レース後、倒れる者が続出した。それを見るたびに益々不安になり、焦燥感につきまとわれた。役員に見送られてスタート地点に向いながらも、それは私から離れられなかった。コースの観客席からは、ハポン、ハポンとさかんに声援がある。そうだ、私は日本代表だった。日本人なのだ。なんとかいいレースをやりたい。日本人としてベストをつくそうと自分に言いきかせる。各艇スタート地点に着き、方向への先をなおす。審判が「チェコスロヴァキー・プレ。メヒュ、プレ・ハポンプレ各艇」にスタート用意の、指示を与える。さあ、来たぞ。我々はスタート用意をする。もう私には焦燥感はなかった。やるだけしかない。「エトブプレ用意」の声が掛かった。五番がエトブレで漕ぎ出した。この野郎、間違えやがって。我々がつられて漕ぎ始めると同時に、すぐパルテがかかった。一本目は合わなかったが二本目からはうまくいき、六本漕いでスタート力漕にうつった時、鐘が突然鳴らされた。「フライングだ、こりゃオレンとこだな」最初から縁起が悪い、艇の向きを変え、再びスタートの地点につく。審判が盛かんにフランス語で西ドイツに何か注意している。「なんだオレんとことちがった。それにしても、フラ語で奴らに言ったってわかるまいに。」艇の向きとへ先をそろえなおした。各艇にスタート用意の指示が与えられた。「エトブ・プレ・パルテ!!」こんどはうまく一斉に出た。かくしてレースは始った。スタートはうまくいった。さあ力漕だ。足のけりをさらに意識する。カナダのオールがキラキラ光っている。その向うのソ連の赤いシャツも見える。「大きく行こう」「さあ行こう」とスパートだ。五分も漕がないうちに、もひとつ向うのソ連・西独が視界から消去った。まだカナダは見えている。「大きく行こう。さあ行こう。」いよいよコンスタントだ。コックスからはピッチ36～37ぐらいでいけと言われていたが、あまり低ピッチではだめだ。37.5ぐらいのピッチで漕ぎ通そうと思った。メキシ



コとはすでに水があき始めた。まあこんなとこには負けないだろう。400通過だ。まだ400か、先は長いな。まだ、カナダは後の方に見える。くそ、カナダの熊野郎なんかに負けるか。どうも、スピードがにぶい。オールに懸る水が重い。徐々に呼吸器管がしめつけられてくる感じだ。リズムがくるってくる。おかしい、ますます水が重く感じられる。くそ、足をける。オールにかいた日ノ丸の赤が、異様に赤い。もうカナダの姿もない。やっと、千米通過だ。あと半分だ。毛唐の奴らに負けてたまるか。もう必死だった。苦しみと自己との戦いしかなかった。オールを握る腕がしびれてきた。足のけりもにぶってきた。私はもう前後運動しているだけだった。苦痛はますます私を押包む。『もうあかん力を抜いてしまえ。』の声が私の中でする。『ちくしょう。漕げ。整調のオレが漕がんかったらどうなるんだ。』必死で私は自分をしかりつけた。体がいうことをきかない。余力を振りしぼって漕いだ。コックスが、「ファイト！頑張」と叫んでいる。コースの周囲の林が、なんだか墨絵の様に見える。胸がしめつけられる。頭がジーンとする。『漕ぐんだ。』という意志のみが我々をささえていた。でも何かを考え続けていた。いろいろな事が浮び、そして消えていった。メキシコにも抜かれた。ラストスパートの声が懸った。必死でピッチを上げた。最後の力を振りしぼってピッチを上げた。もう目の前が真黒だった。「イージオール」ゴールインだ。私は思わず後にひっくりかえった。心臓は今にも破裂しそうに鳴り続け、唯大きく息をするだけだ。敗者復活も順位決定戦も同じ事の繰り返しだった。予選の疲れが抜けず、体力もかなり消耗されていた。いうことをきかない体にむち打って、残りのレースに臨んだ。我々をささえていたのは、気力だけだった。とにかく、二千米漕ぎ通そう。我々はやっとゴールにたどりつくというだけだった。すべてのレースが終った。私は自分自身がこのうえなく情無かった。酸素稀薄に於けるレースの極限状態でどうする事も出来ず、又しようにも体がいう事をきかない。こんな哀れな事はなかった。体力の差、極限状態ではこれが勝負を左右した。力まかせで強引に漕ぎ、キャリアも豊富なクルーに比べ、どちらかと言えば感覚的で、繊細な日本クルーの我々は、極限状態においては、もろくもくずれさった。我々にとっては極限状態でレースをしたという事が、その経験がこれからの我々の行く先々に生き、そして、糧となるであろう。それだけでも、価値があるのではないかと私は信ずる。すべてが終って、敗戦に打ちひしがれがちな我々は逃げたかった。メキシコの自然の明るさはそんな我々を優しく包んでくれた。我々は、久しく忘れていた解放感にひたった。レースが終った日のパーティで知合った、メキシコの選手の姉妹と、彼女達の友達と我々四人チャプルテペック公園へ遊びに行ったのも、楽しい思出だった。ロリータ・ローザ・ジョセフナ・クレメンテイーナ・アルフォンソの面々と池でボートを漕ぎながら歌を歌った。メキシコのシェリトリンド・日本の歌等言葉は違ってもメロディを口ずさめば、それで充分だ。私達が二ソウのボートをくっつけて歌っていると、近くを漕いでいたボートが近より、もっと歌えという。「それじゃ、スキヤキ知っているか。」「知らない。」それじゃと私は歌いだした。日本の九ちゃんの歌だ。『涙がこぼれないように歩く一人ぼっちの夜。』我々は一人ではない。見知らぬ人とも仲間になって歌っている。すばらしい事じゃないか。次は彼らが歌った。知らない曲だったが聞いているだけで楽しかった。遊園地にネオンがついた頃帰ることになった。三人はバスで来たので彼らも一緒に帰ることになり、彼らを入れて9人が一つの車に乗ることになった。9人全部が入れず、さんざん苦労したあげく押込んだ。まさに、ラッシュ時の再現だった。それでも、話せる余裕があった。クレメンティーナは、さかんにこれは日本語でなんと言うのか聞いてくる。彼らの日本語の発音がおかしくて、クスクス笑った。けっさくなのは、神を信じない人を何

と言うのかと聞かれ、考えた末に、無神論者なんて教えておいた。クシャミをした時メキシコでは「サルー（幸運）」と言うが、日本ではなんと言うかと聞かれたときは困った。四人で考えた結果、風邪をひかないのかと心配するだろうから「だいじょうぶ」との結論に達したが、自分ながらおかしく、ゲラゲラ笑った。そうこうしているうちに未だ帰るのは早いし何処へ行こうということになって、ゴショウカンのマリアッチを聞きに行くことになった。そこは教会の傍の広場で日曜の夜だけ行われているそうだ。ロリータと我々だけがマリアッチを聞き、あとは教会に御祈りに行くことになった。クリンティーナが、さっき憶えた言葉で「セリータムシンユンシャ」なんて言っている。まず教会をのぞく。礼拝堂では人々が熱心にひざまづいて祈っている。敬ケンなメキシコ人らが何を祈っており、見ているとジ－ンときた。そっと教会を出た。そこには、さきほどの人々とは対照的にマリアッチの調べにうかれている人々がいた。しばらくマリアッチを聞いていたら、踊りだすものが出てきた。「シミス（ロリータはズの発音ができない）シャルウイダンス？」ときた。こりゃ「王様と私」のメキシコ版だ。なかなかおもしろいダンスだ。そのうちに他の三人も全然知らない女の子に手を引っぱられて踊りの仲間に入ってきた。見物人はやんやのかっさいだ。「ハボンハボンララララ〃」「グラシアス」と言って私は手を握る。楽団の人々も、我々に向ってトランペットを吹鳴らす。時間のすぎるのも忘れて踊り続けた。もう、お祈りに行ったローザ達が出てくる時間になったので、皆と握手して別れる。再び、ハボンハボンララ〃の大合唱。人の良い、楽しいメキシコ人達。貧困の差が厳しくても、陽気で明るいメキシコ人達。ずるい奴も多いが、憎めない奴ら。アスタマニアーナが信条の彼ら。なんと楽しい国だ。

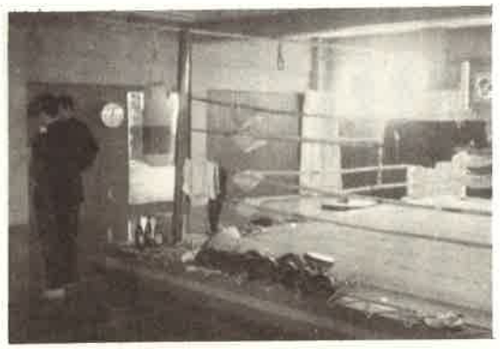
選手村での一ケ月間の生活の間にも、いろいろ考えさせられる事も多かった。ソ連とチェコ、アメリカの白と黒。これらの対立がじかに感じられた。悲しいことだ。同じ人間 同志が、アメリカとは食堂が同じだったのでよく白人と黒人との対立が目についた。白人と黒人との二つのグループに分れて食事をしているのは不自然だった。あの表彰台で我々の胸を打った、人種差別に黒いゲンコツを上げて抗議したカーロスとスミス。カーロスは、選手村ではいつもアフリカの民族衣裳を着ていた。このことも抗議の一種であったと思う。人間が人間を差別する。こんな不当な事が現実に行われている。カーロスとスミスは次の日に選手村から追放された。スミスとカーロスは追放されるほどの悪い事をしたのだろうか。むしろ、無言の人権宣言を行った彼らにアメリカ人は脱帽すべきであろう。ブランデージは、黒人がオリンピックに政治を持込んだと非難し、彼らを追放することによって、自ら恥部をさらけだした。彼らの真意さえもくみとりえず、国のメンツばかりを考えている。人種差別の張本人の彼らが、スミス達の真の叫びにも耳をかさず、弾圧する。確かアメリカは、デモクラシーのお国だと聞いていたんですがね。考えてみれば、彼らの心情は忘れがちなオリンピックの本意をついている。ややもすれば、大国誇示の為に金メダルをあさる。どこかの国は、スポーツ施設も少なく、スポーツを理解しようとせず、メダルを取る為に必死となる。そんな風潮のオリンピックに活を入れてくれたかのようだった。オリンピックは私にいろいろ考えさせてくれた。人間の争い、人間の連帯感、素朴な人間、いろいろな人間がいるが人は争うべきではない。レースは負けたが、極限でのレース経験だけで充分だった。日本を離れ、外国から日本を見てみる。すると、林の中で木しか見られなかったのが、林も見られる。外国で見た日の丸は、日本では天皇制の表現で民主日本にほ不必要と言っていたのに、それがかぎりなく美しく見えてくる。そして、君が代の何とすばらしきこと、帰国して見た、日本の山野の美しさ。そして日本語で話すことの安心感。すし、うどんがうまかったこと。ああ、オレは日本人だった。



## ◇ボクシング部

部長　西村豁通
監督　出口　譲
主将　豊島正照
主務　植田康男　大阪市都島区高倉町二の五二

▽部員数
一回生　一
二〃　二
三〃　二
四〃　四

▽女子の入部否
▽練習場　第二従規館　連絡先TEL（四五一）三一九〇
▽入部金　一〇〇〇円　部費二〇〇円
▽シーズン　四月～七月
九月～十二月
▽練習時間　午後二時三〇分～四時
▽特色
練習時間は短いが内容は充実している。
第二従規館の道場は新しく、京都での公式試合は全て我ボクシング道場を使用している。

▽フェザー級
個人三位　鈴木
▽ジュニア・ウエルター級
計　九
関西学生リーグ（二部）
四三年五月十三日
▽同大　大阪府立体育館
三対四　龍谷大
▽同大　七対〇　桃山学院大
四三年五月二十日
▽同大　大阪府立体育館
三対四　立命館大
四三年五月二七日
▽同大　大阪府立体育館
二対五　大阪工大
四三年六月一日
▽同大　大阪府立体育館
六対一　京都外大
四三年六月八日
▽同大　大阪府立体育館
三対四　大経大
この結果二勝四敗第四位
（リーグ戦メンバー）
鈴木、浜田、橋本、浅野、豊島、安
関西学生トーナメント戦
四三年九月八日
大阪府立体育館
個人五位　浜田
対京都産業大学戦
四三年九月一五日
同大第二従規館道場
同大　六対一　産大
（メンバー）
鈴木、浜田、浅野、橋本、豊島、安、植田
本学の六ポイントすべてK・O勝ちの優秀な成績をおさめる。
京都学生ボクシング
団体の部　第二位